ANNOUNCEMENTS

I. 前理事　佐々木本道氏の逝去を悼む

本会名誉会員　北海道大学名誉教授　佐々木本道氏は1995年6月7日膵臓癌のため満69歳で逝去されました.

佐々木先生は昭和29年（1954年）北海道大学理学部生物学科をご卒業後，34年大学院修了と同時に理学博士を授与され，昭和36年（1961年）から平成2年（1990年）まで，北海道大学に奉職され，理学部附属動物染色体研究施設助教授，ついで教授ならびに施設長として，後進の教育指導に当たられる傍ら脊椎動物の細胞遺伝学的研究に輝かしい業績をあげられました．1990年（平成2年）にご退官後は財団法人佐々木研究所長として病に倒れられるまで奉職されておりました.

先生が成された数々の業績の中で，特筆すべきは，昭和30年代のものに新たな技法により日本人の核型を樹立したことでありましょう．丁度その頃，組織培養法が台頭しはじめ，先生はいち早くこれを染色体研究法への実用化をはかり，日本人の染色体研究に利用されたのであります．当時，日本人の染色体構成には過剰染色体をもつ核型多型が指摘されておりましたが，組織培養法による分析によりそれを否定し，2n＝46 であることを実証されました．その後，各種先天異常，性異常，流産胎児などについてその発生異常と染色体異常との関係，胞状奇胎の原因が雄核発生に起因すること，さらに，ヒトの白血病，ネズミの実験腫瘍などにおいて種々の新たな研究法を導入し，病型・病態に特異的な染色体異常の実体を明らかにするとともに，染色体異常とがん遺伝子との因果関係の分析を行い，これらの諸分野の発展に多大な寄与をなされました．また，先生の染色体研究は実に幅広く，魚類から哺乳類までの種々の脊椎動物に及んでおり，種間における染色体多型，種分化と核型進化，性染色体の形態分化さらには不活性化等に関する多くの知見を発表されております．また，鳥類に関しては，性染色体による性別判定の実用化をはかり，希少鳥類の，中でもトキの性別判定は有名でありますが，これらの保護・繁殖に貢献されました.

先生は，本学会には1957年より評議委員，1967年より編集委員，1981～85年および1988～1989年に理事を歴任され，1988年（昭和63年）には第33回日本人類遺伝学会を主催されました．また，1971年にはヒト染色体の国際標準化パリ会議に出席され分染法の国際規約の制定を行っております.

このように，先生は日本人類遺伝学会の発展に尽力されたのみならず，遺伝学・細胞遺伝学に関連した国内外の諸専門誌の編集委員を歴任され染色体研究に多大な貢献をなされており，佐々木本道先生のご逝去は，わが国のみならず世界の学会にとっても大きな損失であり，痛恨の情に堪えません．先生のご冥福を祈ります.

（吉田廸弘　記）

II. 名誉会員の訃報

本学会の名誉会員，西村秀雄先生（83歳）は，1995年10月17日，急性心不全のため逝去されました．ここに謹んで哀悼の意を表します.

（理事長　中込弥男）

III. 平成7年度第1回理事会

日　時：平成7(1995) 年8月24日（木）　12：30～17：30

場　所：東京医科歯科大学構内・レストラン「あるめいだ」

出席者：三輪理事長，松田(一)（遺伝相談・出生前診断に関する委員会委員長；第40回大会大会長）・新川（認定医制度委員会委員長）・梶井・中込・多田各理事，浜口新理事・今村監事，近藤(喜)教育推進委員会委員長，古山認定士制度委員会委員長，黒木社会保険小委員会委員長（編集幹事），安河内（会計）・池内（庶務）各幹事

報告事項

1. 三輪理事長より，名誉会員の高原滋夫先生と木村資生先生先生（本誌40巻1号，165頁；2号，217頁，1995，参照），および元理事 佐々木本道先生（1995年6月7日）の御逝去が報告された.
2. 庶務幹事より，1994（平成6）年度および1995（平成7）年6月までの会員異動状況が報告された.
3. 会計幹事より，1994（平成6）年度会計報告，1995（平成7）年度会計中間報告がなされた.
4. 黒木選挙管理委員長より，本年度5月～7月に行なわれた学会役員（評議員，理事，監事，学会賞選考委員，理事長）の選挙結果について報告があった（本誌40巻，3号，289頁，1995，参照).
5. 本年度（第40回）の学会大会の準備状況について，松田大会長より報告があった.
6. 来年度（第41回）の学会大会の準備状況について，近藤(喜)大会長より報告があった.
7. 委員会報告
   1) 笹月編集委員長に代わり三輪理事長より，学会誌の刊行状況，投稿と受理状況，ならびに査読に要している期間等について報告があった.
   2) 三輪理事長より，3月31日に開催された学会賞選考委員会の審議結果について報告があった（本誌40巻，2号，218頁，1995，参照).
   3) 教育推進委員会の活動状況と今後の活動方針（医学部のみならず，歯・薬・保健・福祉などの周辺領域における卒前人類遺伝学教育の実態調査など）が，近藤委員長より報告された.
   4) 臨床遺伝学認定医制度委員会の現在の活動状況と今後の見とおし（これまでに認定された認定医，指導医，研修施設の数，および恒久制度における認定試験の予定など）が，新川委員長より報告された．また当委員会の収支決算報告があった.
   5) 臨床細胞遺伝学認定士制度委員会の活動状況（経過措置による第1回認定の結果，研修施設の申請受付け状況，など）が，古山委員長より報告された．また当委員会の収支決算報告があった.
   6) 遺伝相談・出生前診断に関する委員会で起草された「遺伝性疾患の遺伝子診断に関するガイドライン(案)」が松田委員長より提示された.
   7) 社会保険小委員会の活動状況が，黒木委員長より報告された.
8. 第16期日本学術会議・第7部・遺伝医学研連の活動状況について，三輪理事長から経過報告があった.
9. 第5回遺伝医学セミナー（9月1日～3日）の準備状況が新川理事より報告された.
10. 第2回臨床細胞遺伝学セミナー（9月9日～10日）準備状況が，池内幹事（セミナー実行委員長）より報告された.
11. 第9回国際人類遺伝学会会議が，1996年8月18日(日)～23日(金）の期間に，ブラジル・リオ

デジャネイロで開催されることが，三輪理事長より報告された（本誌40巻，1号，165頁，1995年）．さらに，同会議出席者への旅費補助の案内を本誌の Announcement に掲載することが報告された（本誌40巻，3号，303頁，1995，参照）．

協議事項

1. 国内名誉会員および海外名誉会員の推挙について協議された．
2. 1997（平成9）年度第42回大会の開催地候補について協議された．
3. 1996（平成8）年度予算案が提示され，協議のうえ諒承された．
4. 昨年度の評議員会と総会で承認された維持会員募集のための趣意書，およびその申込書が作成されたのに伴い，当会員を実際に募集するための具体的な方策が協議された．
5. 役員の任期（選挙のあった年の翌年1月1日から）と理事会・評議員会の出席者との整合性をはかる案が提示されたが，本年度の第1回理事会は従来どおり新・旧理事の合同で行なわれたことを受けて，本年度大会会期中の理事会・評議員会も従来どおりとし，新たに選出された役員の出席を以て開催されることになった．
6. 前記の整合性をはかる件については，第2回理事会で会則検討委員会をもうけることを提案することが諒承された．
7. 臨床細胞遺伝学認定士制度における研修施設の認定に当たり，認定手数料を徴収する案が，認定士制度委員会の古山委員長より提示され，協議された．

（庶務幹事　池内達郎）

IV. THE 10TH INTERNATIONAL CONGRESS OF HISTOCHEMISTRY AND CYTOCHEMISTRY

August 18 (Sun)–23 (Fri), 1996, Kyoto International Conference Hall, Takaraga-ike, Kyoto, Japan

PRELIMINARY LIST OF TOPICS:

TECHNIQUE

Immunohistochemistry	In situ hybridization
Computerized image processing	Cytophotometry and flow cytometry
Confocal and other new microscopes	Genetic engineering
Histochemistry of enzymes	Histochemistry of carbohydrates

CELL

Nucleus and chromosome	Cytoskeleton and intracellular transport
Cell surface and adhesion molecules	Receptors and signal transduction
Cell cycle and growth	Apoptosis and cell death

SYSTEM

Immune system-autoimmune diseases	Histochemical approach to neuroscience
Cancer-genes and phenotypes	Clinical application

30 YEARS OF ENZYME-LABELED ANTIBODIES

APPLICATION:

Registration forms can be obtained by writing to

Professor Y. Ibata, Chairman, Organizing Committee

The 10th International Congress of Histochemistry and Cytochemistry
c/o Academic Conference Planning, 383 Murakami-cho, Fushimi-ku, Kyoto 612, Japan

Deadline for submission of Abstracts is **March 31, 1996**.

ORGANIZERS:

Honorary President:	Kazuo Ogawa
Honorary Vice President:	Kenjiro Yasuda
President:	Setsuya Fujita
Vice President:	Akira Mizutani

ORGANIZING COMMITTEE

Chairman:	Yasuhiko Ibata
Treasurer:	Kei-ichi Watanabe
Members:	Tsukasa Ashihara (Chairman of Local Committee)
	Paul K. Nakane (Chairman of Program Committee)
	Takuma Saito (Chairman of Publication Committee)

日本学術会議だより No.38

公開講演会「産業空洞化問題を考える」開催さる

平成7年9月　日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは，7月に開催された日本学術会議主催公開講演会「産業空洞化問題を考える」の概要について紹介します。

日本学術会議は、学術の成果を市民に直接還元するための活動として、日本学術会議会員が講師となって、市民を対象に年2回、日本学術会議主催の公開講演会を開催しています。

日本学術会議のグローバリーゼーションと社会構造の変化特別委員会は、いわゆるグローバリゼーションの進展によって我が国の経済・社会が受ける諸種の影響と、それに伴う様々な問題点を吟味し、今後、我が国がとるべきそれらへの対応策の在り方を検討することをその任務とし、特に、現在の我が国にとっての最も重大な危機的事態とも言うべき「産業空洞化」の問題の分析に最重点を置いて、審議を進めつつあります。

今回の公開講演会では、この特別委員会によるそのような分析・審議の成果を踏まえて、3人の講演者によって、まず、(1)我が国の経済を全体として見てマクロ的に考察するという経済学的な視点からは、現在の長期不況と異常な「円高」に伴って余儀なくされつつある我が国産業の「空洞化」という事態をどう捉え、また、それに対応するべき経済政策はどうあるべきか、そして、次に、(2)技術工学的な観点からすれば、このような現在の状況はどのように把握され、また、それについて、どのような問題点が指摘されるべきか、そして、さらに、(3)企業経営の面から見た場合、このようなグローバリゼーションのインパクトはどのような意味を持ち、我が国の企業はどのようにそれに対応しつつあるのか、という3つの視角からの分析が行われました。

この講演会は、平成7年7月14日（金）の午後1時20分から、日本学術会議講堂において約200名の聴講者を集め開催されましたので、その概要をお知らせいたします。

◇次　第

○ 司　会　吉田　民人（第1部会員）
1 開会の辞　利谷　信義（日本学術会議副会長）
2 挨　拶　吉田　民人（第1部会員）
問題提起
3 講　演
(1) 日本経済再生の方途
丹羽　春喜（第3部会員）
(2) 技術移転と空洞化
冨浦　梓（第5部会員）
(3) グローバリゼーションと日本企業の多国籍化
岡本　康雄（第3部副部長）
4 質疑応答
5 閉会の辞　西島　安則（日本学術会議副会長）

◇問題提起

吉田　民人（第1部会員、中央大学文学部教授）

空洞化という言葉は、英語でフォローイングアウトと言われ、これが最初に問題になったのは1960年代のアメリカであり、当時ＥＣにアメリカの自動車あるいは電機産業が出て、アメリカの労働組合が、ジョブ、つまり仕事の輸出であるということでかなり反対したといったようなところから始まって、日本でも、1960年代の後半には東南アジアに直接投資が開始されていた。もちろんこの種の問題は、経済のグローバリゼーションという、まさにグローバリーゼーションと社会構造の変化特別委員会が担当しているテーマの一つであるが、その空洞化が特に最近、円高の状況の中で国際競争力の著しい低下を招くということで、ますます加速されるというふうにみられているわけで、この種のテーマをグローバリゼーションと日本の社会構造の変化の中でも最も緊急のテーマの一つとして取り上げることになった。

空洞化といっても産業の空洞化、金融の空洞化、技術の空洞化、あるいは産業の空洞化も生産の空洞化、経営の空洞化あるいは雇用の空洞化といったさまざまな側面があるわけで、主としてその辺の問題を「産業の空洞化」という一言である意味でラフに総括させていただいた企画である。

中身は三つあり、(1)日本経済をマクロ的な角度から見ての空洞化の原因とその対策について、(2)技術の空洞化に関して、(3)ミクロ的な企業がグローバリゼーションの中で国際化していく。まさにそういう意味で言えばミクロ的であると同時にグローバルな、その意味

でマクロ的な観点から、それぞれ講演が行われる。

ここで出る問題は多岐にわたるが、基本的には空洞化の原因の究明と、それに対する対応策という二つの側面からの講演となるが、例えば大蔵省の立場あるいは日銀の立場、あるいは地方公共団体の立場、あるいは企業の立場、それぞれの立場によって微妙に特殊利益が反映せざるを得ないような問題構造になっているが、研究者というのはそういう特定の、つまり職業的な集団の利益から比較的解放されて、非常に客観的な判断をすることができる職業集団に属しておることから、できるだけ客観的に、一般的に特殊な利害にとらわれない角度からの検討をさせていただくことになっているので、研究者としてはこういう見方をしているんだということをぜひお聞きいただきたい。

◇日本経済再生の方途

～円高と産業空洞化問題をどう考えるべきか～

丹羽　春喜

（第３部会員、グローバリーゼーションと社会構造の変化特別委員会委員長）

- ケインズ　対　反ケインズ
- 経済学の50～100年の退歩
  ——ベトナム後遺症的ニヒリズム——
- 政策の不合理性と長期経済停滞
- 三重の悪循環的ジレンマによる不況の永続化
- 「信賞必罰」システムのフロート制と「円高」の責め苦、そして産業空洞化
- 「低成長→低税収→財政赤字→緊縮財政→不況永続化」の悪循環
- 「リストラ不況」の危険性
- 20年以上もの超長期不況
- 結果としての「近隣窮乏化」政策（対外経済摩擦の根本的原因）
- 「正常な」国際分業と「異常な」空洞化とを混同するな
- ミスリーディングな「成熟経済」パラダイム
- 厖大なデフレ・ギャップ
  ——それを直視しようとしない『経済白書』の危険性——
- 「規制緩和」、「リストラ」、「行革」、「市場開放」、等々の限界と欺瞞性
- 「合成の誤謬」の問題をまじめに直視しようとしない風潮
- 朝野をあげての幼児化現象
- 必要な「最善のシステム」ビジョン（市場経済＋国民経済予算）への回帰
  ——むしろ、デフレ・ギャップこそ「真の財源」——
- 震災復興と被災者支援の政策はどうあるべきか
  ——国家の本質的な機能とは何か——
- 混迷からの脱却へ

およそ、上記のような諸項目について、問題点を解きあかし、日本経済再生の方途について、国民経済予算制度を現在の市場経済をベースにしている経済体制に組み込むべし等の提言を行いました。

◇技術移転と空洞化

冨浦　梓（第５部会員、新日本製鐵㈱常任顧問）

製造業は全て技術の発明と、その移転によって、拡大、発展を成し遂げてきた。鉄鋼業における技術移転の歴史を振り返ってみると、一般的に技術の個人依存性が高いものほど移転が困難であり、技術の表象可能性の高いものほど移転が容易である事に気がつく。

技術の完全な表象には多くの困難が存在し、それ故に未だ経験に依存するところが多い。技術の表象可能性を高めるには、製造に伴って生ずる現象を分析して、基本過程を取り出し、それ等を統合して新たなシステムを発現するという行為の繰返しが必要とされる。

このような経験の科学化を継続的に行われないとすると、技術の空洞化が生じやすくなる。

このような点について着目し、技術移転と空洞化について、生産技術としての工学から社会技術としての工学へのシフト等の具体的提案としてまとめました。

◇グローバリゼーションと日本企業の多国籍化

岡本　康雄（第３部副部長、青山学院大学国際政治経済学部教授）

日本の製造企業は、1960年代後半東南アジアに生産拠点を軸とした海外直接投資を始めた。そして70年代に入ると、貿易摩擦回避がらみで米国向けの海外直接投資が、電機・電子、さらに乗用車といった分野において大規模に行われるにいたった。ＥＵにも同じ様な分野での生産拠点の形成が進められた。この間、日本企業の競争優位資源の海外移転が果たしてどのように行われうるか、が重要な課題であった。

他方、世界規模では、各国、特に先進国間の所得水準の平準化と市場の同質化技術水準の均等化と革新の同期化が進み、情報通信技術の急速な進歩とそれによる伝達コストの低下、各国制度の自由化がこれに加わって、80年代国境なき経済——グローバリゼーションが急速に進展し、グローバル規模での競争が重要な課題であった。

そして80年代後半からは、アジアＮＩＥＳ、90年代にはアセアンが台頭し、東アジア全体がグローバルな注目を浴びるにいたっている。そして日本は、急速な円高によりアセアンへの生産移転を急テンポに進めざるをえなくなっている。それは、日本国内の空洞化を誘発している。

これら三つは、今現在、同時解決を求められている課題である。このトライアドについて考察しました。

※　なお、この講演会の模様については、前回の講演会と同様、日学双書№24「産業空洞化問題を考える」として、㈶日本学術協力財団より刊行予定です。

日本医学会だより
JAMS News
1995年10月 No. 14

日本医学会
〒113 東京都文京区本駒込2-28-16
日本医師会館内 TEL 03-3946-2121

第103回日本医学会シンポジウム

1995年8月25日～27日に，「アポトーシス—概念と実体—」との課題の下に，パレスホテル箱根においてクローズド形式で開催した．

本シンポジウムは，玉置憲一，長田重一，金澤一郎各氏がシンポジウム組織委員としてプログラムの編成その他を行ってきたものである．

プログラムは，I. 発生・分化とアポトーシス，II. 病態とアポトーシス，III. アポトーシスの分子機構，の3セッションから構成され，アポトーシスの定義を含めた最近の研究成果につき参加者が活発に論議した（参加者総数39名）．記録集は，平成8年3月頃に刊行の予定．

第104回日本医学会シンポジウム

「消化管癌における最近の話題—胃癌と大腸癌—」が，1995年12月1日（金，10：00～17：30）に日本医師会館大講堂で開催される予定である．

本シンポジウムの組織委員は，三輪　剛，小堀鷗一郎，中村祐輔の3氏からなる．参加希望者は，日本医学会に葉書で申し込まれたい．参加費は無料．

プログラムの概要は，下記のとおり．

I. 胃癌・大腸癌の分子生物学

1. ジーンターゲティングを用いたヒト大腸癌発癌過程の解析/野田哲生（癌研・細胞生物学）
2. 胃癌の多段階発癌機構とその臨床応用/田原榮一（広島大・病理学）
3. 大腸癌の多段階発生機構とその臨床応用/中村祐輔（東大・医科研）

II. 臨床のトピックス—内科系—

4. ここまでできる内視鏡治療—胃癌—/吉田茂昭（国立がんセンター東病院）
5. ここまでできる内視鏡治療—大腸癌—/工藤進英（秋田赤十字病院）
6. 胃癌・大腸癌の化学療法とQOL評価/栗原稔（昭和大学豊洲病院）
7. Helicobacter pylori感染と胃癌の関わり/浅香正博（北大・内科学）

III. 臨床のトピックス—外科系—

III-I. 機能温存手術（縮小手術）

8. 胃癌/丸山圭一（国立がんセンター）
9. 大腸癌に対する縮小手術および機能温存手術/斉藤幸夫（国立国際医療センター）

III-II. 他臓器合併切除（拡大手術）

10. スキルス胃癌に対する拡大根治手術「左上腹内臓全摘術＋Appleby手術」/古河　洋（大阪府立成人病センター）
11. 直腸癌手術における機能温存と拡大郭清の両立/森　武生（都立駒込病院）

医学賞・医学研究助成費授賞の決定

医学賞・医学研究助成費授与の選考は，日本医師会から本会に委託されており，本年度は9月11日にそのための委員会が開催された．授賞は，日本医師会設立記念医学大会（11月1日）

の場において行われる．

日本医師会医学賞は，候補17件から下記の3氏を選考し，日本医師会に推薦した（敬称略）．

・喫煙の発がん影響解明と対策に関する研究/渡邊　昌（国立がんセンター・疫学）
・消化器癌の増殖，浸潤，転移に関連する遺伝子の研究/谷内　昭（札幌医大・内科学）
・先天性心疾患に対する新しい外科治療法の開発/川島康生（国立循環器病センター・外科）

また**日本医師会医学研究助成費**は，応募71件中，次の15氏を選考した．

・視交叉上核における概日リズム発現及び同調の分子機構に関する研究/岡村　均（神戸大・解剖学）
・新たな補体活性化経路，レクチン経路に関する研究/藤田禎三（福島医大・免疫学）
・ストレス応答による免疫制御の分子機構の解析/吉開泰信（名古屋大・免疫学）
・開発途上国における母子保健向上のための方法論/倉辻忠俊（国立小児医療センター・小児科学）
・前白血病状態から白血病への進展の分子機構の解析/三谷絹子（東大・内科学）
・アンジオテンシンII受容体サブタイプ遺伝子の発現調節と新しい転写抑制蛋白の構造決定に関する研究/松原弘明（関西医大・内科学）
・HTLV-I型関節症の分子生物学的病因解明と遺伝子治療の開発/北島　勲（鹿児島大・内科学）
・インスリン依存性糖尿病（IDDM）の予知・予防を目的とした分子遺伝学的研究/池上博司（大阪大・内科学）
・多機能器官再生因子HGFcDNA導入による肺線維症遺伝子治療に関する研究/八重柏政宏（東北大加齢医学研・内科学）
・IgA腎症における糸球体障害の細胞生物学的研究/吉岡加寿夫（近畿大・小児科学）
・ヒト遺伝子組換え型bFGF（Basic fibroblast growth factor）を用いた虚血性心疾患に対する外科的血管新生療法の基礎的研究/小塚裕（東大・外科学）
・遺伝子の多型性分析からみた癌発生および転移の予知と人種間での発癌特異性の解析/加藤俊二（日医大・外科学）
・微量癌細胞検出のための遺伝子学的診断法の確立/森　正樹（九州大生体防御医学研・外科学）
・網膜虚血に基づく遅発性神経細胞死の細胞内機構の解明と保護物質の開発/柏井　聡（京大・眼科学）
・尿路性器癌における抗癌剤耐性の機序と克服に関する研究/内藤誠二（九大・泌尿器科学）

新規加盟学会審査制度検討委員会

日本医学会では，小泉明委員長の下で，新規加盟を希望する学会に対する従来の審査のあり方が見直されつつあり，既報のとおり第62回日本医学会評議員会（平成7年2月）において，その中間報告が承認された．現在，本報告作成のためできるだけ広い視野からの審議を続け，評議員会で承認された新規加盟学会審査のための常置委員会の設置を含め，審査手続き，審査基準等につき検討している．

医学用語管理事業

本会の医学用語管理委員会は，文部省「医学用語標準化の調査研究」によって，文部省学術用語集医学編の原案作成に努力中である．今夏は，用語選択・記載方法などに関する問題点について，日本医学会分科会の用語委員にアンケート調査を行った．このアンケート調査の結果に基づき，今後，医学用語標準化の問題点が整理され，より明確になると期待される．文部省に対しては，本年度末に報告される予定．